静中・静高関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報　第12号
昭和56年12月11日発行
編集人　月見里得知郎

五十六年度総会

二百六十余名、一堂に会して

＜六月十七日＞

郷土色豊かに、岳南健児の意気を示し、心楽しい交歓ができる総会――五十六年度総会は六月十七日（水）、例年通りの会場の築地スエヒロで開催された。大宴会場には続々と会員が集まる。なつかしい顔、めずらしい顔々……。

来賓として同窓会の鈴木会長、高橋副会長、母校の渡辺新校長・松永先生、恩師の重田・土屋・鈴木の三先生を迎え、集うもの二百六十余名の賑やかな総会は、校歌斉唱で幕を開けた。

宮沢会長の心暖まる挨拶に続いて渡辺校長の母校の近況、学業・スポーツの諸活動の報告などを拝聴して議事に入った。

五十五年度事業報告・会計報告監査報告についで、役員は全員留任の提案、また五十六年度事業計画・予算計画もそれぞれ可決されて、懇親パーティーにうつった。

乾杯の音頭をとられたのは大正九年卒業、三十五回の和田顕太郎大先輩。入学の年に制定された校歌の話をされて「岳南健児七百の理想は高し……」を高らかに歌われた。ほんとにすばらしい。

（因みに昭和二十四年七月「下山事件」の初代国鉄総裁下山定則氏は三十四回の卒業生である）

ヤングは九十七回卒の新会員十一名を含め大学生三十名もつどい若さを発散させ新しい、息吹きを総会にそそいでくれる。まことにたくましい。（写真）

杯を酌み交わし、静岡名産を頬ばり、和やかな談笑が続く……。先輩・同輩・後輩の深まるつきあいは、自然に明日への糧となる。

昭和五十年に結成し、七年めを迎えた関東同窓会、総会をふりかえってみると――

50・6・3　東京会館九階ローズルームで結成総会　三四〇名
51・6・3　同会場で　二八〇名
52・6・3　日比谷三井ビル大会議室で　四二〇名
53・6・2　百年祭記念総会　築地スエヒロで　三四〇名
54・6・8　同会場で　二八〇名
55・6・20　同会場で　二五〇名

役員・幹事のご苦労の数々、そして総会のたびに故郷の特産品を準備してくれる諸兄のご協力などに心から感謝しながら、また、来年の総会により多くの友を誘って集まることを約しながら楽しいパーティーの幕は閉じられた。

（上杉重吉記）

総会で可決された五五年度決算及び五六年度予算次頁の通りです

その後の同窓会活動

○六月一七日　五六年度総会
総会の詳細別掲の通り

○七月二二日　幹事会
トッパンムーア社会議室にて。
出席者二七名、議事次の通り
一、総会報告。奥野副会長より報告され承認された。
二、会報、名簿の発送依頼。
三、会報一二号原稿依頼。
本号には名簿印刷後の補遺訂正及び会費拠出者を掲載する予定が発表され了承された。

○九月六日　江の島会総会
江の島恵比寿屋で行なわれ、約五十名が出席して盛大であった。
議事としては、神奈川支部規約の改正及び役員改選を審議決定した。永野会長が名誉会長に、42村松直氏が会長に選出された。引続き懇親会が和やかに行なわれた。

○九月二六日　規約検討小委
静高同窓会館にて行なわれ、本年度中間答申を検討した。関東から月見里委員が出席した。

○十月二四日　規約検討委及び同窓会合同役員会。
いずれも静高同窓会館に於て。規約検討委の中間答申及び総会は議事項を審議し、原案通り可決した。関東から月見里委員出席。

昭和55年度　静中・静高関東同窓会決算書

（S 55.4.1～S 56.3.31）

Ⅰ 収　入		
54年度繰越金		614,032円
〃 年会費	(36名)	86,000円
55年度年会費	(802名)	1,562,000円
〃 広告収入		310,000円
寄付金		80,000円
雑収入		32,705円
計		2,684,737円
Ⅱ 支　出		
会報		430,000円
名簿		200,000円
郵送費		595,345円
印刷費		115,825円
人件費	(アルバイト料)	100,000円
寄付金		30,000円
交際費		26,800円
消耗品費		68,220円
応援旗		78,000円
会合補助費		153,970円
計		1,798,160円
Ⅲ 残　高	(次年度繰越)	886,577円

上記監査の結果適正であることを認めます。

昭和56年4月9日

監事　村松　直

監事　村井東助

昭和56年度　静中・静高関東同窓会予算

（S 56.4.1—S 57.3.31）

Ⅰ 収　入		
年会費	2,000円×1,000人	2,000,000円
広告収入		500,000円
計		2,500,000円
Ⅱ 支　出		
会報発行費	(215円×2,000人)	430,000円
名簿印刷費	(350円×2,000)	700,000円
郵送費	(2,000人)	750,000円
印刷費		200,000円
人件費		100,000円
事務用品費		5,000円
レクリエーション助成費		50,000円
会合補助費		200,000円
予備費		65,000円
計		2,500,000円

各期便り

四三回

夏の例会を、去る八月二十六日（水）に東電環境エンジニアリング㈱の別館五階会議室で開いた。

昼食会でスタートしてから丁度五回目で殆んどの会員が入れ替り立ち替り出席してお互いに顔を合わせたことになる。

当日は常連の清水、倉沢、芹沢田崎の諸君が旅行で欠席、柳沢、小川、小河君等が急用で欠席となり残念であった。

集まる者今井、井沢、池谷、北里、島田、豊島、長戸、西沢、三宅、三好、吉江の諸君であった。

北里君差入れのビールで乾盃、真夏の午後のひとときを冷たいビールで喉を潤して語らい過すことができた。

席上、「四三会も親睦ゴルフを始めないとやれなくなってしまうよ」との提案で、この秋にはきっとやるということになった。次回の例会は、十二月三日（木）昼席で同一場所で忘年会を兼ねて開催することをきめた。

静岡の四三会本部からも予告で今秋は一泊の計画で登呂公園の県立芹沢銈介記念館等を見学することになっている。

四三会ゴルフ発足

夏の例会で話し合ったゴルフを十月二十一日地元の三好君の設営で鷹之台カントリークラブで開いた。

ニュースでは台風の当り年で二十四号台風の来襲を報じていて、天候も心配されたが、幸いにゴルフには最高の日和で風もなく、二組六名でのんびりとお互いにプレーを楽しむことができた。

シングルプレーヤーの北里君も往年の名将の深謀遠慮には勝てずに吉江君がワンアンダーで優勝した。鎌倉から長征（？）の池谷君が準優勝で普段の精進さを示してくれた。

いつも顔を合わせておりながらも、過去の多忙な日々や交錯した人生のしがらみから、ようやく喜寿を過ぎてから解放されてのプレーではあったが、遅蒔きながら、「これから何回か」が目標となり次回は来春開くこととなった。

叙勲（四月二十九日）

四十三回　吉江誠一氏

勲二等瑞宝章

元陸上自衛隊幕僚長

敬弔　昭和五十六年六月三十日

四十三回　国友正一氏

元セントラルリーグ審判員

（西沢純三）

四六回

四六期生は昭和六年に卒業しているので、今年は丁度、半世紀五十年目にあたる。

是非、五十年目の関東同期会を実施したいということになった。

前回は、五年前に池袋で開いたが、今度は東中野の日本閣で、十

月十五日五時からと決められた。前回と同様に、千野製作所会長の青木君の御世話である。秘書室長の栗原さんが、万事はじめから終りまで面倒をみてくれて、感謝に耐えない。

出席者は十一名と少ないが、静岡の幹事繁田君をはじめ、体調を痛めた大藤君まで、ステッキをついて伊豆からの出席である。

みんな意気盛んで、六十八歳とは思えない。モテモテの話から、ハマラメの医学まで出尽して、八時に解散となった。

来る二年後は満七十歳になる。全員また集って盛大にやることを約したのである。

写真は前列向って右から阿部、内山、一宮、大藤、土方、田中、後列向って右から岩崎、鼠入、青木、繁田、磯塚の諸兄。

（阿部俊一）

四九回

静中卒業以来四十七年、六十五歳の㊙老人の域に達しましたが、お元気でご活躍のことと思います。

昭和五十六年の総会が九月二十日、雨上りの大崩海岸の西はずれの丘の上、富士山の見える焼津観光ホテルで開催された。関東から十四名参加し、総勢三十五名だった。本告亮一先生をお迎えした。

先生は九十二歳のご高齢にも拘らず、元気な皆とお会いでき非常にうれしい、長生きした甲斐があったとご挨拶され、大変お元気でした。吾々も先生のご長命にあやかり

五十や六十は花ならつぼみ
七十や八十は働きざかり
九十になって迎えがきたら百まで待てと追返せ

の意気で進もうと誓った。

会は、まぐろの大名づくりの実演で始まり、一同岳南健児の昔にかえり、時の過ぎるのを忘れた。

校歌合唱で閉会した。

一泊組は夜を徹して人生劇場を展開した。

出席者（関東勢）

荒井、石田、今村、植木、江山、大津、加藤、篠田、菅沼、杉本、曽根、田中（良）、山家、山村（地元および関西）

相羽、青木（英）、渥美、江河、大石、大塚、風間、佐藤、佐野、沢野、直原、杉山（佐）、鈴木（東）、田中（貞）、竹田、塚本、中村、戸塚、原木、山崎（博）、山本。

（菅沼　栄）

五二回

秋もいよいよ深まり今年も早や二ヶ月余りで終ろうとしている。

諸兄！変りなく元気でやっている事と思うが如何。会報十号では坂本君の入院加療中の事やら清水の長坂君が昨年十月物故した事をお報せしたが、あの元気だった坂本君が御家族その他皆さんの暖かい看護、激励にも拘らず回復する事なく本年元旦に故人となってしまった事を報告しなければならない事になった。我々同期の会合について何かと尽力してくれた彼、ゴルフの好きだった彼、色々と想い出のつきない我々のホープであった。心から冥福を祈る。その彼の一年忌が本年十二月二十八日に行われる由であるが、未亡人より一年忌にあたり、想い出記の投稿の御依頼があったので、川島・曽根・直原の三名が夫々感じたままを綴り投稿した事を報告する。一年忌には未亡人の手で文集が編さんされる由。最近になってこう云う悲報を出す事が増えて来た事は運命とは云え、何とも淋しい限りだ。

○　○

皆が元気でやっている事について報告しよう。

在京同期会

昨年十一月二十一日、岩本・今井両君が世話人で、有楽町国際ビル「ヨーデル」で在京生十三名、静岡より香川・深津の両君も参加、昔のニキビ面時代に戻っての歓声がアチコチで聞かれた。香川の「赤城の子守唄」関口の「緑の地平線」の名調子もとび出し、お互いの健在ぶりを確め合った。次回の世話人に松永・関口の両君が指名され二〇時頃散会となった。一部の者は、静岡勢二名の歓迎の意味から雨にもめげず銀座の紅灯の巷へ二次会と称し消えて行った。今回の会合では西田豊馬君が初め

て顔を出した。実に四十年ぶりであり意義のある集いであった。本年の会合は目下相談中であるが、十一月下旬頃には又楽しい会合が行われる事と思う。

当日の在京生出席者。

綾部・川島・太田・関口・佐藤・松永・新美・西田・苫米地・今井・岩本・曽根・直原

同期総会

例年通り本年五月静岡、浮月で開催。恩師三上・古曳両先生をお迎えして、集まった者三十三名。在京からは相島・関口・苫米地・西田・直原が出席し、姐さん連のお酌で皆意気盛んだった。今年は恒例のゴルフ会は中止となった。

最近、若返りの方法を摸索する意味もあり、正面切った会と云う事でない気ままな集まりとして、川島・曽根・直原を常連として時々苫米地も加して月一回位杯を傾ける集いやら、芝生に白球を追い足の鍛錬等をやっているが実に楽しい集いであるので、諸兄に参加を呼びかけ、一人二人と輪が拡がってゆく事を希っているが如何。

その後入手した同期生の消息。

○渋谷正敏君。昨年八月よりひ臓治療の為入院中の処、本年始め無事退院し元気にやっている。

○苫米地一楼君。アサヒレキセイ㈱本社勤務より、十月一日付で同社取締役東京支店長へ移動。

電話〇三（五五三）八四八〇

○大草知久君。中学一年から幼年学校、士官学校と進み陸上自衛隊を陸将補で退官した人であるので覚えていない人が多いと思うが、付属小学校では佐藤（昌）・市川（雄）・鼠入・新美・沢本の諸君と一緒だった由。過日の関東同窓会幹事会の席上で53期徳永氏より聞いたので、懐しい諸兄も居ると思い紹介する次第。

住所　田無市芝久保町二―一四―一二。〒一八八

電話〇四二四（六六）三四六七

（直原澄衛）

五四回

東京に出て参りました

バス通りに面したアパートの二階、枕元を通る車の騒音に悩まされていたのが、上京四ヶ月の慣れでどうやら安眠できるようになりました。

三十数年間就職先の山口県徳山市に引籠っていたので、同窓会は勿論のこと同期会にも至って疎遠になって居りました。そこで、貴重な紙面の浪費は甚だ心苦しいのですが、やゝ詳しい自己紹介によって、諸兄にお見知り置きを得たいと考えた次第です。

大正十年七月秋田県能代市生まれ、小学生の時千葉県に引越し、館山市の安房中から静中に転校、静高理乙を経て東大応化卒後、徳山曹達㈱に入ったのが昭和十九年九月です。

二十年の元旦、浜松市三方ヶ原の陸軍航空教育隊に入隊、地上勤務で三重県兵庫県の飛行場を転々とした後原隊に戻り、幹候上等兵で終戦を迎えました。その年十二月会社に復職、爾来徳山市に住み着いて居た訳です。

徳山の本社工場での勤務は、初めと終りに研究所と石油化学関係に居た以外は、三十一年以上もセメントの製造に従事しました。このたび現役を退いてからの仕事もセメントおよび建材関係が主となっています。

十数年前にたった一度海外出張した経験があり、工場の省力化だけをテーマに、七ヶ国二十八社を丁度四週間で訪問しました。こんなに慌ただしい旅での楽しい想出は、国々土地々々の食物飲物を賞美できたことで、コペンハーゲンで十数銘柄のビールに挑戦し途中でダウンした話を、同好会にに投稿したこともありました。

無芸大食、体重当りで云えばかなりいける口で、清酒換算二合の晩酌がどうしても止められません。動物性脂肪やコレステロールの多いようなおかずが好きですが昨今は極力避けています。幼時からの一番の好物「あわびの水貝」も、義歯では噛みにくくなりました。

身上調書の類の趣味の項は「読書」と記入する他ない全くの没趣味人間、囲碁・将棋・麻雀はやらず、野球は観ないという付き合いの悪さです。その読書も実は「積ん読」の方で、買い込んでも読み切る本は十冊に一冊位かも知れません。

今年五月二十三日の五四季会総会に卒業後初めて参加、二十数人の諸兄と久濶を叙することが叶いました。続いて六月十七日には関東同窓会に飛入り参加盛会に感激しましたが、その中で五十四回の出席が少なかったのは如何にも淋しく感じました。新入りが口幅ったいことを申して恐縮乍ら、「お互にもっと積極的に親睦をはかろうではありませんか」と提案させて頂き、小文を結びます。

（塩谷陽一）

五五回

中国旅行と亡友大石鉄男君の思い出

私は今年九月、大学出版部協会の訪中団に参加して中国を旅行した。北京からハルピンに飛び、長春（旧新京）、瀋陽（旧奉天）、大連と旧満鉄で南下し、大連から空路北京を経由して帰国するという二週間の旅であった。北京は初めてであるが、東北地区（旧満州）は二度目であった。と言うのは、四十年前の昭和十六年七月、私は亡き友大石鉄男君と当時の満州国を二人で廻ったのである。その時は神戸から船で大連に向い、ここで旅順にいた大石君と落合った。

二人で大連、旅順、奉天、撫順、錦州、承徳、新京、ハルピンと廻り、牡丹江から北朝鮮の羅津に出て、日本海を横断して敦賀に上陸、静岡へ帰るという一月近い旅であった。途中関東軍特別大演習にぶつかって列車が大幅に減ったため、帰国には随分苦労した。今回の旅行は東北地区を前回とは逆に旅した形であったが、四十年前の青春時代が思い起されて懐しさでいっぱいであった。しかし何処へ行っても在りし日の大石君の白線帽姿が瞼に浮んできて、一抹の淋しさをふり切ることができなかった。ハルピンのキタイスカヤ通り（中央大街）からはロシア娘の姿は消えてしまったが、石だたみだけは残っており、かつて同級生の高橋豊君と静中二年先輩の逸見一郎氏が迎えてくれた長春駅は昔のままであった。静中先輩の某氏に昼食を御馳走になった旧満銀クラブ（長春賓館）に宿泊したのも奇遇であった。殊に旅の終り近く彼が迎えに出てくれた大連埠頭に立った時は感無量であった。「おーい、よく来た。待っていたぞ」彼は帽子をふりながら大声で船上の私に呼びかけてくれた。上陸してすぐ、「ヴィクトリア」で当時内地ではもう珍しくなっていたコーヒーとケーキを御馳走してくれたことが思い起された。

私と彼とは城内西小学校で六年間同じクラスであった。一番上と一番下が同じ年で、彼が九人兄弟の八番目、私が八人兄弟の七番目、兄どうしが同級生なら、姉どうしが小学校・女学校を通じての友人であるという工合だから、家族ぐるみの交際であった。静中時代も四年と五年の時が同じクラスで、身長も同じくらいであったので、席がとなりであった。二人とも成績の方はパッとしなかったが受験という重荷を背負わされて仕方なしに勉強した口であった。高校は旅順と静岡、大学は京都と東京、専攻は工学部と文学部と違った道を歩むようになったが、かえって親しみを増したような気がする。休暇には、よく二人で旅に出た。川端康成の「伊豆の踊子」にあこがれて、徒歩で天城を越し、下田から大島へ渡った。大島から式根島が見えたので急に行きたくなって行ってみたが、しけで帰りの船が三日も欠航し、やっとのことで静岡へ帰ると、両家では大さわぎ、大島警察署に捜索願いが出されていたという失敗もあった。

社会に出てからも、たがいに暇を見付けて一緒に旅行した。早春の信濃路を歩いたり蔵王や赤倉で下手なスキーを楽しんだりした。白馬や槍ヶ岳へも一緒に登ったし五色・花巻など東北の温泉に遊んだこともあった。旅行中は好き勝手なことを遠慮なしに言いあうだけで、自分の生活や人生観などについて深く語り合うことはなかった。しかしこういったことは手紙のやりとりのなかで報せあっていたし、三十年もつきあっているとおたがいの心の中は手にとるようにわかった。いわば「あ・うん」の呼吸であったのであろうか。

昭和三十五年七月、私は三年の任期でオーストラリアに赴任することになった。出発の半月ほど前彼と有楽町で待合わせて夕食をともにした。これが最後になろうなど夢にも思わなかった。三年後には再会できると確信していたのである。ところが渡濠も間もなく、静岡の山本礼司君から彼が病気で入院、しかも「がん」らしいと報せてきた。大きな衝撃を受けた私であったが、異郷にある身、どう仕様もなく、ただ激励の手紙を送るだけであった。やがてその年の暮、彼の手紙が届いた。耳下から頸にかけ固いこぶができ、はじめは淋巴線が脹れたぐらいに思っていたがなかなか直らない。私の兄の口添えもあって慈恵医大で診てもらったが、どうも癌らしい、静中の同級生の堀江重遠君が親切にアドバイスしてくれ、都立広尾病院に移って放射線治療を受けているが、患部も半分ほどに収縮し、大晦日には退院できそうである、という。

始めは少しく生命の危険を感じたが、今は直ってからの夢を追っている。手術という短い間の苦痛は免れたが放射線による長期的な耐乏を強いられている。一番辛いのは味覚を完全に奪われたこと、甘さもからさも酸味も何もない。苦ささえない文字通りの味気なさだ。それでも体力を消耗しないために生卵をすすりチーズをかんで頑張っている。今がその正念場だろう。

（中略）病気になって以来、常に昂然と頭をもたげるスタイルだけは維持して、試練に真向から対決する心掛けだけは十分だ。西の学校で跳箱を跳び越せなかった君と僕だが、どこか芯の強さだけはあるのかも知れない。君の帰国を待って、体力を消耗しない程度の小旅行を企画しよう。

苦痛に耐えながら病に決然と立向う彼の心意気と、私の心配を少しでも和げようとする優しい心づかいが偲ばれる手紙であった。

異国に在ると祖国からの便りは待遠しい。今日は来たか、明日は来るかの毎日である。明くる昭和三十六年の三月、二度目の手紙が届いた。この三月十六日消印の手紙が私への最後の便りとなった。

手紙有難う。一月二十五日手術した。何しろネックだから痛くて苦しくて辛かった。二時三十分から六時近くまでかかった。局部麻酔だからすべて覚えている。幸い患部もうまく切除できた。怪しい所にはラヂウムのアイソトープを植えこんだ。どうやら打棄り勝ちでこの闘いは勝ちとれたようだ。二月十五日退院、早速静岡へ舞い戻った。車中、富士が美しかった。命の代償に多少の犠牲は止むを得ない。体重は終戦時のそれに減った。放射線のため、当てた方の頭髪が芝生を刈り取った様な状態、唾液腺をやられたので物の味が六〇パーセント、食事は味噌汁をぶっかけて流しこむ。僕の好きな鮨はまだパクつけない。このうちいくつかは時間の経過とともに回復するだろう。いくつかは残るだろう。目下は誕生日をやっと過ぎた次男の乳母車を

押しながら日向ぼっこして静養している。体に自信がつくまでは職場には復帰しない積り。昨日は奈良のお水取、気候も随分春めいて来た。静岡は西風さえ吹かなければ病後の静養には絶好だ。

この時点で「勝った」と思った彼であったが、やはり勝てなかった。私の度々の送信にも返事は来なかった。八月になって夫人からの便りがあり、咳がひどく、腰が痛みはじめ、六月半ばに上京し、広尾病院で診断した結果、肺、肝臓、背骨に転移、若いだけに進み方が驚くばかり早く、六月二十四日に国立静岡病院に入院、リンゲルを打っているとのことであった。夫人も最後まで希望を失わず「中田様が日本へお帰りの頃にはきっときっと元気な姿でお目にかかれますことと信じています」と結んであった。どうかあと二年、頑張ってくれ、私は心の中で祈っていたが、やはり間に合わなかった。十月の末、静岡の兄から彼の病気が絶望的になったことが知らされ、それを追いかけるように十月二十五日朝の死が伝えられた。兄が令兄勇一氏から聞いた話ではさすがの彼も秋の始めには死を覚悟していたようだったという。

彼が逝ってからもう二十年の歳月が流れた。私も来年は還暦を迎える。第一線を退く日も近付いてきたようだ。もし彼が生きていてくれたならば、また一緒に気ままな旅に出られるのに、と思うことがある。どうしてあんなに早く逝ってしまったんだと口惜しくも思われる。しかし振返ってみると、彼という心の友を得たこと、彼と青春の喜びをともにできたことは私にとって大きな幸せであった。私はこの幸せを感謝しつつ、心から彼の冥福を祈りたい。

（中田吉信）

五六回

五六回生のわれわれは、今年昭和五六年に卒業してから満四十年が過ぎ去った。思えば変動の多い年月であった。特に戦争によって直接間接に多くの友を失った。悲しいことである。ここにあらためて彼等のご冥福を祈る。

われわれの入学した昭和十一年の春は遅れていたらしく、入学記念の写真には校庭の桜が満開で、平和そのものであった。しかし当時すでに大陸には戦火があり、それが次第に拡大して思いがけない方向に進んで行った。

それでもわれわれの在学中にはまだまだ大きな変化にはならなかった。三年のときに行なわれる予定の箱根一泊の旅行は中止されたけれども、四年の春には日光、東京にそれぞれ一泊する修学旅行を行なうことができた。そのとき、日光の馬返から中禅寺湖畔まで、いろは坂を往復とも歩いて上下したことは、現在の完備された自動車道を見るにつけ、なつかしい思い出である。

またその年の夏休みには草薙の野球場の近くのゆるやかな斜面にあった茶畑を、鍬を振ったり、大八車を押したりして整地する作業に参加した。雲一つない炎天の下で苦しい仕事であったけれども、今は立派な陸上競技場になっているのを見て、感慨を新たにした。

この夏休みにはやはり学校の行事として多くの友と一緒に富士登山をした。今では五合目まで車で行くけれども、そのときは、富士吉田の浅間神社から歩き始めて、八合目に一泊した。翌日は朝から霧が立ちこめていて、御来光を拝むことのできなかったことは残念であった。

それから四十年、われわれはそれぞれの道を歩んできた。私は気象庁に入るとすぐに観測の仕事を担当してきた。昭和三八・三九年には富士山頂に気象レーダーを設置する仕事に参加して何度か登山したので、「二度登るはバカ」をはるかに通り越している。

われわれは、毎年十一月にクラス会を開いて旧交をあたためている。今年も、中村、奥野、成田、山田の諸兄が世話人となって十三日に開かれることになっている。

（清水逸郎）

五九回

高橋裕君の外国での受勲のお報らせ

59回卒の現東大工学部教授の先生は、フランスとの学術文化交流に多大な貢献をされたご功績に対して、さる四月十六日に同国よりパルムザカデミック勲章（教育功労勲章）シュヴァリエ章を贈られました。また一九七八年九月には、ネパール王国から、ゴルカ・タクシン・バフ勲章をすでに受章しておられます。

いずれも先生の幅広い国際的なご活躍の一端を賞されたもので、私共静中時代の同級生として、又関東同窓会のメンバーとして誠に喜ばしいことであります。

過日、この件に関しまして、私も東大工学部土木工学科の代表の方から、受章のお祝いの会に御招待を受けたのですが、社用のため参列出来ず残念でした。しかし同期の青木豊君がお祝いに馳けつけたそうでほっとしました。

今後先生の益々の御活躍を期待すると共に、この立派な功績に対して心から敬意を表し会報を通じて御報告申しあげた次第です。

（奥沢　徹）

六〇回

新登場のご挨拶

申訳ないことながら、私は卒業以来、静中の方々とは殆ど交流がありませんでした。ところが今年の五月三十日、総成カントリーでNHKの柴田正臣君にお会いするチャンスに恵まれました。私は十九年十月に海兵に行きましたのでそれ以来の再会になります。

私は現在ソニー本社業務部におり、その関係でNHKの方々ともおつき合いがあります。現大津放送局長の塩田さんから、「私の所の柴田が、満間さんは静中出身ではないかと聞いていましたよ」と言われておりましたので、柴田君の顔を思い浮かべて、わくわくしながらゴルフ場に出かけました。お会いした時は、なつかしさで何とも言えませんでした。

このことがきっかけとなり、こ

の間の関東同窓会に初めて参加させて頂き、上杉君、野呂君にお会いし、なつかしくお話をする機会を得ました。お会いすると一見五十数歳の顔も、程なく十六、七歳の顔に変わってゆくのは不思議でもありまたなつかしいものです。

この会場で凸版印刷の月見里さんにお会いしたのには驚きました。わが中学の大先輩であったとは。といいますのは、十数年前、研究所の私の研究室でカラービデオカメラの撮像管トリニコンの開発に着手した頃、それに使用する色ストライプフィルタの試作を月見里さんの所にお願いしに行き、以来、毎年お薬書を頂いているからです。

同窓会の名簿を頂いて更にびっくりしたのは、リコーの渡辺さんが同級だったことです。昨年だったと思いますが、海兵七十六期の同期であるという関係で品川の本社に私を尋ねて来られましたが。その際には静中の同期生とはとんと気がつきませんでした。全く汗顔の至りです。

名簿の中には、なつかしいお名前が一杯並んでおり、薄れた記憶ではありますが、なつかしい昔の日々がよみがえってきています。

考えて見ますと、カトリック教会の原俊君とは、年賀状だけではありますが、ずっと交流がありましたので完全にそうだとは言えませんが、今述べましたような一連の再会によって、浦島太郎よろしく三十数年振りに、静中の中に帰って参りました。これを機会に、皆さんのお仲間に加えて頂きたくお願い申し上げます。

（満間　猛）

六四回

毎年一回七夕の夜に逢うという取決めで、今年も七月七日新宿今佐で六四期の同期会が催された。はるばる、静岡より秋山義明、河村勉、山下啓也、藤田栄の四君が上京し、在京生二〇名と一夜を歓談した。名波、岩本幹事の挨拶で始まり、藤田君より昨年の参院選の協力御礼と、捲土重来を期す覚悟の披瀝があった。席上ゴルフをやろうという発言があり、一〇月四日（日曜）第一回ゴルフコンペティションが、六六期安田正弥君の配慮で、伊豆大仁カントリ倶楽部で開催された。絶好の秋晴れのもと富士を眺め乍ら、一同三〇数年前の紅顔の美少年に戻り、ソフトボールを白いゴルフボールに置き替えて戦中戦後、住友の馬小屋、城内の兵舎の話等をしながら歩き回った。前半は増田誠男、野沢正憲、村上喜代二の激戦であったが、期待された渡辺宏一、岩本吉雄、神谷武男、静岡より参加の井上公司、青野信太郎君も後半は昼に飲みすぎたためか、スコアがのびず野沢が優勝し、母校の校章入の楯を手にした。

色々な賞品が出たが、岩本君寄贈のささなみ賞（脚立）は青野君に輝いた。又来年には東京静岡合同で、もっと盛大にやろうと再会を約し、夕闇に消える伊豆の山々を後に東と西に別れた。

（野沢正憲）

第1回ゴルフコンペ　伊豆大仁カントリー倶楽部にて

七〇回

全体と詳細

私の限られた体験から感じた事であるが、米国等では日本と中国の文化はかなり混同されていると思う。先方の立場からみれば、太平洋をへだてた対岸の日本と中国は同種の東洋文化としてひとつに取り扱われるのは或る程度致しかたのない事かも知れない。

しかし日本人の私にとっては、これが何とも残念なことに思われてならない。私の感じでは日本と中国の文化には基本的な違いがあり、これを外国人にもわかってもらい、日本の文化の本質を正しく理解してほしいものだと考えている。

中国は云うまでもなく古くから世界中でも一、二とされる高い文明が発展してきた地域であり、日本文化も古来その強い影響のもとにおかれた事は歴史の示すところであるが、たまたま我国は大陸との間に海という自然の障壁のおかげで独自性を保ちつづけることが出来たのである。

中国へ実際に行ったことがない私には中国文化を比較して正しく論ずる程の知識はないが、以下に個人的感想ないし意見として述べてみたい。即に先人がより優れた見地から示された理論のむし返しになったり無知により誤解も多々あると思う。

華北大平原を舞台に多くの民族の興亡の繰返しとともに、開花展開してさた中国文化は大陸的であり、また中心の文化といわれている。

それに較べ日本文化は島国の中で育ち、発展し、たえず大陸文化の影響を受けながら、それを消化吸収して個有の文化を作っていった。

日本は周りを海に囲まれており人々の活動の大地として境界がはっきりしており社会的にも安定を

得やすい舞台が提供されていた。

大陸の文化は規模雄大で構成がしっかりしており骨太で自然との対比が強烈であるが、これは人々が単調で厳しい自然条件の大陸を舞台に活動する場合当然指向する方向である。また大きな舞台の中心を支配するものは、それだけ大きな権力の上に立っているわけであるから、それが形となって表われ、都市や建築は大規模に、美術工芸品は豪華になる。大規模な建造物を作るにはより強い権力と多数の労力が必要となり、それが一人ないし少数の指導者の意志のもとに組織化されていく事になる。従がって、指導者と個々の労働者もしくは職人達との間の距離は遠くなり、彼等の働く時の気持は指導者とのへだたりが大きくなる。全体の枠組みを決め事業の推進を管理するのが指導者であり、各部の詳細を一つづつ作り積上げていくのが労働者もしくは職人達であるとすれば、全体は壮大にして力強くなり大陸的視界からみて堂々たるものとなるが、詳細はともすれば粗く血の通わないものになり勝ちであろう。

島国で山も多く自然が変化に富んでおり、周囲からの外敵の侵入の危険が少く安定し、又大陸に較べれば小さな舞台では、権力集中も限られた領域の中の事であるから、その自然との対応も対決というより調和を目ざす事になるのも当然の成りゆきであろうか。

このような文化のもとでは、美術工芸や建築も規模もほどほどで調和と優美を指向することになるのであろうか。このような環境では人々の考え方も、工芸や建築もきめ細かなものになり、各部の詳細が人間の肌合になじむ優美で精密なものになるのも自然のなりゆきであろうか。きめの細かさという点では、西ドイツやチェコスロバキアにもそれを感じる。我国も含めてこれらの国々では職人達の身分や生活が比較的安定していたのであろうか。民族の歴史やその舞台となった国土の自然条件は人々にどのような影響を与えてきたのか。はなはだとりとめのない話になってしまったが、その辺を今後もう少し研究してみたい気がする。（東電㈱原子力建設部・工学博士・田中宏志）

七三回

熱狂ゴルフ顛末記

久方ぶりの楽しく賑やかな集りであった。老いも若きも？いや年代は同じであっても、外見は貫禄十分の社長タイプから、若々しい青年社員迄とバラエティーに富む総勢23名が東京、静岡の中間地点天城日活ホテルに集合したのは、六月七日午後六時からの前夜祭であった。参加者のなかには、既に前々夜祭ですませてきたのか元気の良い声が飛び交い、兎にも角にも二日間に渡るエベントはスタートしたのである。

我々73期は公式には年一～二回非公式には数かぎりなく、酒と美女に充たされた（無論女性は同期の女性だが）楽しい集会を持っている。55年度12月に前年度幹事の牧野、石川、山本君から56年度の新幹事、赤木、羽山、古井君への引き継ぎが行われた際「たまには健康的に泊りがけでゴルフをやろう」という事になり、ゴルフだけならいざ知らず、健康的に泊りがけで、という言葉には多少不安を感じた私ではあったが、そこはすぐ人を信ずる私の事、皆の親睦の為ならと、代表幹事としての不吉な予感をはらいのけ同意し今日を迎えたわけである。

宴会は、幹事羽山君の司会で始り、乾杯後、各人の近況が語られた。ユーモアある野次のなか、掛合万才的自己紹介は実に愉快で、宴会場での二時間半は、あっというまに過ぎ、その後は各部屋で深夜はおろか翌朝のゴルフプレーのスタート近く迄飲み続けていた猛者もおり、大変な宴会だった。話題の中心は近況に始まっても、最終的に在学当時の話に花が咲くのはいつもの事だが、お前は二〇〇番台だったが、おれは一九〇番台で成績が良かったなどと厳張っている姿など、あまり子供には見せられない光景である。時間がたつにつれ、オメー、バッキャローという懐しい言葉が耳に入る。面白いもので、学生時代世話好きだった者は、相変らず自分が飲むのも忘れ、氷や水の用意をしたり、酔払の世話に忙しく動きまわっており、一方では、ただただ飲み続けている者もいる。夜中には誰れそれが居なくなったと騒ぎ出すやらで、朝迄賑やかな夜であった。

翌日は台風にでもなってくれと願う数名の期待も虚しくまばゆいほどの好天となった。スタートの状況は、前夜の主脇は脇役に、前夜の脇役は主役にと完全に逆転した。脇役ならいい方で、なかには夢遊病者がゴルフをやっているのかと見紛う者もいる。それでと全員口だけは達者で、平素接待ゴルフで大して良くもないショットにナイスショットの連発をしてきた反動か強烈な野次が飛び交う。

我々73期のゴルフコンペは過去数回行なってきているが、ゴルフとしてのレベルもなかなかなもので必ず70台で回ってくる者が二、三人は出る。最初の内こそ目の覚めなかった連中も、若さにものをいわせ？すばらしいショットの連発で、かなりのスコアをマークしてあがってくる。当日の賞品も、各人持ちよりの為バラエティーに富み、レストランのディナー券あり、ゴルフ練習場券、手書き百人一首、薬品セット、ネクタイ、ウイスキーありで楽しい賞品授与となった。プレー後のパーティーも資金集めに天才的能力を発揮する幹事が、なんだかんだと、今迄聞いた事もない罰金制度をつくって盛大に打ち上げを行ない、全員満足して、次回での再会を約束して無事帰路についたわけである。

成績発表（十位）

		O	I	G	H	N
優	石川征	44	47	91	25	66
準	中西	41	42	83	14	69
3	杉山光	39	40	79	12	67
4	松永文	41	43	84	15	69
5	石田茂	49	57	106	36	70
6	渡辺	47	52	99	28	71
7	石田行	37	41	78	6	72
8	山中	42	40	82	8	74

10	9	中川	
	44	鈴木和	43
	46	45	
	90	88	
	14	9	
	76	79	

3位杉山は初参加

（中西英一）

八七回

――卒業一〇年を経て――

我々八七回生もはや卒業後一〇年を経てしまった。大学に入り、社会人となって、まさに「あっ」という間の一〇年であった。自分では、それほど年月がたったとは感じないのだが、順調に社会に巣立った者はすでに社会人六年生であり、その呼称も新人から中堅へと変わった。又、毎年正月にバスケット部OB会で訪れる近代的な新体育館の存在が一〇年の年月を否応なしに感じさせる。

この一〇年の八七期の活動は決して華やかではなかった。現在、本会名簿に登載されている者がわずか八名であることからもその事実は良くわかる。しかし、皆を代表に弁解させてもらえばこれは決して八七期の愛校心の欠如ではなく、単に個々人が自分の人生を探す時間に忙殺され、うしろを振り返る余裕がなかっただけである。（かく言う私自身も、恥かしながら本会へ登録したのは本年度からであり、去る六月一七日の総会が初参加であった）

さて、静高時代の最大の思い出はやはり、バスケット部での活動である。当時、生意気盛りであった私は、先輩と長髪を切らぬと言っては衝突し、又部を辞めたいと言って鈴木明徴先生と衝突したことも度々であった。しかし、そんな私でもクラブでの思い出は数多くつきることがない。中でも、先輩に連れて行ってもらった広島でのインターハイは、当時一年生であった私にとって強烈な印象として残っている。特にインターハイ出場を決めた試合の終了後、整理体操をしながら当時たった二人の三年生であった久保・深津両先輩が流した涙は現在でも忘れることができない。その後、我々もあんな涙を流そうではないかと同輩と誓い合ったが、残念ながらそれは夢と消えてしまった。しかし、努力がむくわれた時の喜びを教えてもらっただけでもそれは私にとって非常に貴重な体験であった。又広島では先輩の紹介でポーラの寮に御世話になったが、そこでの数日間も貴重であった。先輩や先生方のそれまで知ることのできなかった素顔にふれ、何か修学旅行のような気分ですらあった。又、毎年恒例であった夏の二部練習も当時は苦しくてやめたいとばかり考えていたが今となっては現在の厳しい弁護士業務をささえる私の体力と気力を養ったのは、あの練習ではなかったろうかと感謝すらしている。何だかとりとめのない思い出話となってしまったが、ともかく静高は現在でも私の中に形のあるものとして残っている。そして静高という共通の原点を持つ人間が集まるとき、私は単なる友人、先輩とは異なる安心感を感ずることができる。そんな単純な動機からではあるが、この会への参加を八七回の中にも広げて行くことを祈ってペンをおくことにしたいと思う。

（平岩正史）

ハイキング会

十一月三日予ての計画によって小仏峠―景信山―高尾山のコースをハイキングしました。

前日雨でお天気が心配でしたが当日の朝は雨が上がり段々晴れるとの予報、流石は明治の天長節だ等と感心しながら出発、集合地高尾駅北口には八時半早々と68荒谷大川の両常連、次いで70藤浪（旧姓大蝶）さん、更に60渡辺夫妻が加わり月見里とも六名となった。

小仏バス停から暫くは渓流を左中央高速道を右に見て旧甲州街道を緩やかに登る。舗装された道はまだ濡れて居り、道端の野菊やアカマンマの蔭から沢蟹が出て来たり秋色の旧道も仲々楽しい。

暫くして山路に入り石道の所々に昨夜の雨が小さな流れになっている。杉木立から沢道に曲がればおや、蟇の殿！、「これはこの辺りの者でござる」と許り、わざわざ御出迎えとは恐縮。

ジグザグ道の登りに少し汗ばんだ頃、伐採植林地を抜ければ小仏峠である。茶店で休憩。見返れば黄葉紅葉を織り交ぜて、正に山の麓の裾模様である。

茶店のお土産品は帰りの事として景信山へ。少し登れば見晴しの良い稜線に出る。東に武蔵の平地西に甲斐の山々、相模湖を眼下にその向うに富士山が淡く初化粧の姿を見せて思わず立止ってカメラを取り出す。

稜線の両側は伐採跡に櫨や楢の紅葉、ヤマシロギクの白やノコンギクの紫も山路の味わい深い。

一旦林中を下って再び石道を登る。呼吸を整えつつ見れば、竜胆が一株やや淋し気に咲いていた。

十一時過ぎ景信山頂着、記念写真の後茶店で昼食とする。御婦人方の御馳走もさる事ながら、茶店のなめこ汁と沢庵きやら蕗は本物で実に美味であった。

十二時出発。先程の景色を賞でつつ小仏峠に帰り小休止。

この辺りは昔甲州往還の関所跡等もあって茶店が多く、又おみやげ品も本当に土地の産物である。杖や山椒のすりこぎ、万年茸、又季節の茸類、自然薯、あけび、センブリ等々。御婦人方はお買物。

峠から少々登って城山。これから高尾山への道は丸木の階段が多く、結構脚にこたえる。然し楓や桜等の植込があって美しい。

行交う人々も多くなり、三時大見晴に着き一休み、四時頃ケーブルで降り高尾山口駅で解散した。

お天気もまあまあ、登り降りも左程きつからず、景信山の景色、茶店のなめこ汁やお土産等々秋色を満喫して楽しい一日でした。

（月見里記）

謎解きの随想

40回野崎操一氏の著書「心の軌跡」から

編集委員　月見里　得知郎

野崎先輩は建築家として令名高く、現在、日本エアーコンジショナーズ㈱相談役、日本電気清浄協会副会長として御活躍中ですが、この度御著書「心の軌跡」を御出版になり、私共にも御寄贈下さいました。

天才的な閃きと、御専門の技術的考証と、実に興味津々たるものがありますので、これから幾つかのテーマに分けて御紹介する事と致します。

竜安寺石庭はカシオペア

竜安寺の石庭の作者については相阿弥、細川勝元、金森宗和、夢想国師、義天禅師、特芳禅師、鉄船禅師、小太郎、清二郎、建子の名が挙げられているが、正確な作者は不明といわれている。いずれにせよ非凡の作者であったことは間違いない。作者の意図が判らないために、謎の石庭として古来いろいろな見方がある。

まず故事に因んだ見方として、『槐記』が書かれた二百五十年前の昔から「虎の子渡し」と称して有名である。十五個の大小の石を渡河する親子の虎の群に喩え、何処から眺めても、必ず一個石が隠れて見えないのを、親虎は子虎を庇って河を渡るという伝説に結びつけて、虎の子渡しの名がつけられた。虎の子渡しには、もう一つの説がある。中国の後漢の時代に劉琨という太子がいた。仁政を施したので、民生が繁栄し、附近に棲んでいた虎が、子虎を連れ河を渡って去って行った故事を石庭に表現して、竜安寺を起した細川勝元の人徳を称えたものだろうという。

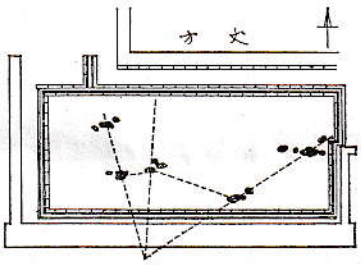
また点在した石群と白沙は、緑渺とした海や雲に見えるので、「海と島」或は「雲海に突き出た峰々」の大自然を表わしたものとの見方もある。元来が禅寺の庭なので仏教的な見方がいくつかあり、五群の石を禅院の「五山」に喩えるのが一つ。さらに「十六羅漢」が河を渡る図であるとか、九金山八海水を略して「九山八海」を象徴しているという見方もあれば、禅の根本である「心」の字になっているという説も聞く。諸説まちまちで、中には「作者は恐らく余りむつかしい意味を持たせた心意は無かったのではないか」とか「後世の者がとやかく俗説を唱えるべきではない」などという絶望的な意見さえあるが、「ここで力点を置かれているのは石の形ではなく、石の配置にある」と竹山道雄のいう論評には同感である。

初めて竜安寺石庭を見学したのは、昭和五年の春であった。それ以来どの見方も至極もっともな説ではあるが、必ずしも現在の配置でなくてもよいので、素直に納得することが出来ず、作者の構想を窺い知る術もないままに、どこにこの石庭の真因が秘められているのか、配石の関係位置を考えてみたが、遂によい結論を得ることが出来ないでいた。

ところが、竜安寺方丈庭園平面図を見ていた時、ふと、これはカシオペア星座にヒントを得て、禅の心境に立ち、作庭法にも叶った創作ではないかと気づいた。竜安寺石庭の配石で最も特色のある点は、五つの石群が流れW型をしていることである。流れW型といえばカシオペア星座を思い出すであろう。現在でこそ都会の夜空は光公害のために、以前のような満天にダイヤモンドをちりばめた星ぼしを見ることは不可能だが、作庭当時の数百年前は、どんなに美しい星空であったろう。ましてやカシオペアは星座の中でも、美しい形をした星座であるから、宇宙の神秘と禅の心とが融合し、限られた内庭に無限の空間を取り入れた構想が、一人の天才の脳裡にひらめいたのではないだろうか。

女神カシオペア

カシオペア星座



竜安寺石庭

石庭の配石とカシオペアの形とが如何に似ているか両者を対比して見ると、鏡に写したかと思われるほどである。念のためにカシオペアの出ている晩、ガラス板に透かしプロットして石庭の図に重ねて見て、ピタリと合致するので確信を持つに至った。

この両者の五点を結ぶW型の四本の線の長さの割合、各線が交わる角度が似ているばかりではない。左右の両辺を延長した交点から中央の一点を通して延長した方角が、石庭では北を、カシオペアでは北極星を指している。反対に北側の方丈から中央の三尊石の中尊石を通し、仮の交点の方向に視線を延ばせば、油土塀越しに、鏡容池と桂川の真南一七キロの彼方に、竜安寺の建立者細川勝元が信仰していた石清水八幡宮の鎮座する男山を、遙拝することが出来たはずである。

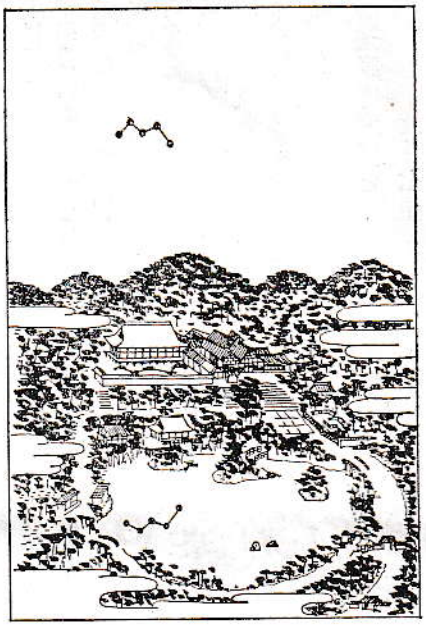
今まで星に関連のある見方は無かったので、はなはだ唐突に受け取られると思うので、その理由を説明しなくてはならない。古代よ

り日本民族が天体から受けた恩恵は、その神格化の尊卑の差を見ても明らかである。太陽を天照大神月を月読之命と敬うのに対して、星は天津甕星。

国旗を見ても、星を頼りに流浪する遊牧民族、洪水に荒された農地を再区画しなければならない農耕民族や、羅針盤の無かった海洋民族を先祖とする国の国旗は星である。例えば、中近東、東欧、地中海沿岸、新大陸に移動した民族は三十カ国を数えるが、皆星の国旗である。一方、太陽をシンボルとする国旗は日本、フィリッピン台湾、アルゼンチン、ウルグァイなどあるが、日本はその代表的なもの。これは古代から稲作を主とし、太陽が生活のエネルギー源であったために、日本は日の国で星の国ではなかった。従って日本人の大多数は北斗七星ぐらいしか星座の名を知らない。それでも事が足りたし、星との生活関係は少なかった。

然るに、この石庭が作られた室町時代末期から江戸時代初期に至る頃の星に対する日本の社会は、古代とは事情を異にしていた。太陽のお蔭のもとに農耕や漁猟を営む古代の農民や漁夫と異なり、中世の公卿、僧侶、武家、庶民の一部の階層は、生活と時間の余裕が出来て、夜は月や星を歌に詠み詩に作った。

またその時期には、仏教、特に禅を取り入れた劇文学として能楽・謡曲が足利義満・義政の庇護のもとに興隆し、その基礎を築いた人々の中でも世阿弥（一三六三―一四四三）は希代の作者であった。彼の作品を見ると、月や星を織り込んだ名曲が多く、当時の星や月の美しさを裏づけるものがある。熊野の「北斗の星の曇りなき」、天鼓の「二星の館の前に風冷やかに夜も更けて」「人間の水は南、星は北に拱くの」、融の「喩へば月のある夜は、星の淡きが如くなり」などと月星を謡っている。



鏡容池に映るカシオペア

わが国では関心の薄かった星座に、西洋では古代バビロア人によって男神、女神、獣物、鳥類、器物の名をつけ、神話や伝説を作って、神秘の念を抱いたことは勿論、実用に供したことも頷ける。

星座は八十八宿ある中でも、大熊座の北斗七星とカシオペア座とは周極星と称して、北極星の周囲を、相対して時計の針と反対方向に廻っている。前者は春夏に、後者は秋冬に北方の夜空に仰ぎ見られ、共に北極星を見つけて、方向を知るのに役立つ星座である。カシオペアの和名は、その形から碇星とか山形星とかいわれているが、西洋ではギリシャ神話に出て来る女神、古代エチオピア王ケフェウスの后の名で、星座の形は彼女が長椅子に倚っている姿である。カシオペアが一番高い位置に上り、真北の仰角六六度から六九度の間に見られる時期は、昔の刻限で初更、現在の午後八時については、晩秋の十一月二十一日頃である。

十五個の石は鋭い稜のある花崗岩の白川石、丸味を帯びた水成岩の青石、砂岩の自然石が用いられている。五石群にはそれぞれ親石があって。方丈の方向即ち北に面している。同じ石の面でも、直射日光の当る南面は陽に焼けて乾燥し潤いがないが、北面は常に冷たく湿り気があって、苔の生成に好条件なので石に雅趣が出て来る。その北面を方丈に向けている。

庭石の周囲は一面に白沙が敷き詰められているが、白沙といっても白い砂ではなく、黒雲母花崗岩をを粉砕、篩分けして一・五センチから二センでの粒を揃えた砕石である。花崗岩は硬質で且変質し難いから、永年踏まれたり掻き均されても、粉々になったり風化し砂状にならない。白沙が砂でなく砕石であるために、箒目が風雨によって崩されない。粒揃いであることは空隙率が高く、三五パーセントはあるから、雨水の吸収量が多く、仮に砕石層が三〇センチあれば一〇〇ミリの大雨が降っても石庭が水浸しになることはない。空隙率の多いことは消音性を持つことになるから、周囲の騒音を吸収してしまい静寂な環境が得られる。

白沙の箒目は石群の周囲のみ楕円形で、他は一面東西方向に平行の波形に引かれている。もしも白沙が平らに均されていれば、直射日光が方丈へ反射して、眩いばかりか夏は輻射熱で暑さに耐えられないであろう。波形の襞は光と熱を向う側へ反射する役目を果している。

塀は特別保護建造物に指定されている油土塀であるが、これは築城と同じ壁造り法で、堅牢且耐久性に富んでいる。高さはプライバシイを保ちながらも、南を遥かに眺められる高さである。石庭の四辺には雨落溝を廻らしているが、その位置は方丈と塀の軒先の真下に当っている。そのために石庭の内面には屋根から落ちる汚れた雨滴が、飛散流入する惧れがない。

さて重厚な油土塀に囲まれた石庭を見渡すに、枯れる草木も無く涸れる水も無く、唯万古不易の岩石のみしか無い。その岩石は星の構成物と同一である。不動不変かと思えば電光朝露、雨雪風月に千

変万化し、瞬時にして移り変る石庭の姿である。私には、虎の子渡には見えない。世俗を超越した一角、五十光年彼方のカシオペア星座を天に、枯山水の配石を地に、見る人々を天地人に対応させた真の宇宙の庭であると見るのである。

これは私の推理であるが、竜安寺の方丈南庭の作庭を下命された作者が、晩秋の星づく夜、明鏡止水の鏡容池の辺りを、後世に残すべき唯一の石庭の構想を練るために逍遙していた。池の面に映じたカシオペアの形に、これぞとヒントを得たのではないかと思われてならない。

終りに一つの願いがある。引きも切らない観光客も、管理保善の財源として誠に有難く大切であろうけれども、人類の生殺与奪の権を握っている大国の指導者に、一度でよいから見て貰いたい。そして、宇宙の真理に逆らわぬ根本の心を掴んで頂くことである。その時、作庭者は初めて、以て冥するものがあり、保存された古文化財は最高の真価を発揮するであろう。

柴屋寺庭園と北斗七星

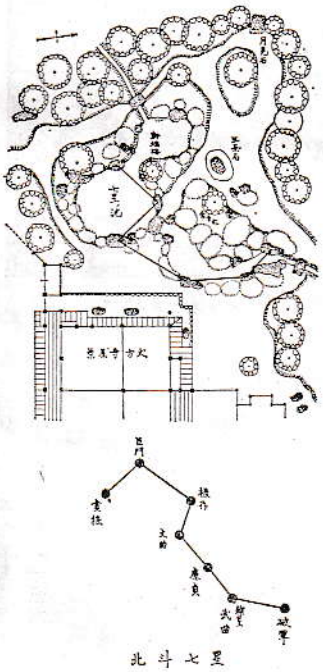
吐月峰柴屋寺に七星の石があると聞いて、七星とは紛れもなく、北斗七星であろうと思った。竜安寺石庭がカシオペアならば、その対称の北斗七星の庭がどこかにあるに違いないと、予測していたので、早速吐月峰を訪れた。

しかし七星の石らしいものは見当らず、池の縁と庭内の所々に大小の石が配されているのを確かめただけで一先ず帰って来てしまった。それでも念のために、寺に問い合わせたところ、七星の石は無いが、池を七星の池と称していて、池の縁に七曜石といって大きい石が据えられているとの回答を得た。

柴屋寺は静岡市丸子、東海道五十三次の鞠子の宿にある。旧市内の町外れ弥勒の安倍川餅の元祖石部屋の前を通り、安倍川橋を渡ると元宿に出る。とろろ汁で有名な丁字屋の店先に、芭蕉の「梅わかな丸子の宿のとろろ汁」の句碑が立っている。国道一号線の右手、吐月峰入口の標識の所から、泉ヶ谷に入り歓昌院坂に通ずる道を、清流に沿って五〇〇メートルほど行くと、右側の竹林の中に天柱山吐月峰柴屋寺があり、県名勝及史蹟庭園に指定されている。

東は吐月峰、西は天柱山、北は首陽山に囲まれ、南のみ谷間が開けて、遠く丸子富士が望まれる。東の尖った峰が月を吐くように見えるので吐月峰と呼び、煙草盆の灰落しに吐月峰と焼印を押した竹筒で、世に知られている。ここに小ぢんまりとした古い庭があり、室町時代の築庭で、形式は山麓湧水小池庭、宗長（一四四八―一五三二）の作。

宗長は永正元年（一五〇四）丸子に草庵を結び吐月峰と称した。



そこが柴屋寺である。また喜見庵を作り、梅・竹・宇津の山蔦楓を植え、池に水を引いて湛えた。時に竜安寺方丈上棟（一四九九）の五年後の年である。大永五年（一五二五）再び喜見庵に戻って来て庭園の荒廃しているのを嘆き、大永六年（一五二六）石を立て水を流し桜などを植えた。その後、醍醐寺の菩提院や大徳寺の真珠庵に庭園の用で上洛している。天文元年（一五三二）宗長没後、天文十三年（一五四四）連歌師宗牧が柴屋寺を訪ね、水石が昔日の面影とあまり変化していない有様を見ている。以上が宗長の柴屋寺作庭の経過で、現在に至っている。

柴屋寺庭園は三方の山を借景として、中央に池を作り、池の縁には護岸の石を据え、植栽刈込をあしらい、銀閣寺の庭を模した傾向がうかがわれる。池水は東の山からの湧水を、東北から引いて庭の右手の細長い池に入れ、中の丸い池、奥の池を経て、西南の隅から落とし、外の清流に放つ作庭法の順流形式を採っている。

庭石については、月見石、三条石は明記されているが、七曜石は定かでない。おそらく七星の池の縁に据えられた大き目の七個の石の総称であろう。そこで改めて庭

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック
熱函病院（ねつかん）
院長　小坂　博（67回）
住所　熱海市春日町12―2
TEL　0557―83―3131

話題のスペース
（明治通りと大久保通りの交叉点）
レストラン・モア
小人数から30名様くらいまでクラス会等に最適です
土屋晃康（67回陸上）
TEL　03―208―2931・204―1251
東京都新宿区大久保2―1―3

園の実測をし、平面図を画いて配石を見ると、主要な石が北斗七星を形作っているのである。

それを七曜石といわれているそうだが、出来れば七星石と呼んだ方がよいと思う。というのは、日・月・火・水・木・金・土・羅睺・計都を九曜といい、七曜ではない。もし七星ならば、北斗の貪狼・巨門・禄存・文曲・廉貞・武曲・破軍で一つ一つの石に星の名がつくことになるから、七曜石というより七星石といった方が適切であろう。

北斗七星の和名は、七つ星とか四三の星であまり冴えない呼び方であるが、中国から仏教と共に伝来した北斗七星は仏教美術の中で燦然と輝いている。法隆寺・久米田寺・道隆寺の星曼荼羅・玄証本唐本北斗曼荼羅のほか、妙見菩薩・大日如来・如意観音の絵像に取り入れられて、信仰の対象となっている。

北斗七星が庭園に現れたのは、西芳寺の潭北亭の庭に、北斗七星を象った紫竹七本が植えられたこと。西芳寺を見て足利義政が造った慈照寺銀閣の池の中に、北斗石という浮石が一個立っていること。そして宗長は銀閣に倣って庭を作っているから、柴屋寺の七星石がもし北斗七星であるならば、庭園における北斗七星に関連があることになる。

さて作庭者の宗長であるが、東海道を駿府から西へ、鞠子・岡部・藤枝と過ぎた次の宿、島田の刀鍛冶五条義助の子として生れ、大徳寺の一休禅師について禅を修め、宗祗に入門して連歌師となり柴屋軒と号した。また和歌、能楽にも造詣深く、日記・手記の著作もあり当時の文化人であった。郷土の領主は今川氏であったので、義元の祖父義忠と父氏親の二代に仕えている。

今川氏は京都進出の野望を持ち武家勢力に対しては、細川勝元と山名宗全の応仁の乱に際し、義忠は上洛して細川側に与している。公卿については、宗長が連歌を通じて交友が多かったのを高く評価し、また軍使として武田信虎との和議交渉に当らせている。当時、連歌師や僧侶は諸国の出入が自由で、あったので今川氏は宗長を厚遇し、柴屋寺の土地を提供して、側近に置きたかったのであろう。

結論として、宗長は郷土の豪族今川氏に属し、今川氏は京都の実力者細川氏の傘下にあり、細川勝元は竜安寺を起し、石庭を作らせた。その竜安寺石庭はカシオペアに似ているが作者は不明。一方、柴屋寺の庭は北斗七星で宗長の作である。しかもカシオペアと北斗七星は互に周極星であり、作庭の時期は同じ室町時代と相通ずる点が多い。それらを勘案すると、竜安寺石庭の作庭者は柴屋寺庭園の宗長と何らかの関係があるように思われるのである。

五六年度会費拠出者

期別

二六　土屋正三
二七　丸山毅夫
二八　石黒精一、幡鎌俊次
二九　鈴木鋭児、藤本赴
三一　塚田英夫、鈴木栄一
三二　岡本敏典
三四　桑山寅三、馬渡正之
三五　畔柳安雄、永野清、和田顕太郎
三六　萩原史郎
三七　坂東環城
三八　石割正、大村秀雄、国塩耕一郎
三九　石井周平、中村寛二、増井四郎
四〇　伴野三千良、野崎操一、増田完五、渡辺英夫
四一　伊藤顕信、大森茂、篠原正鈴木篤、中村安時、山本五十吉
四二　井出多米夫、井上寿徳、岩崎康、岩波信平、国分友英田中治、中嶋敏、坂野隆介堀夷、宮崎忠輝、宮澤次郎村上禎威、村松直、山田貴一郎
四三　坏晴行、今井志郎、井沢源治、小川幹夫、北里良夫、倉沢栄吉、芹沢正憲、田崎茂夫、長戸寛美、西沢純三三好由三郎、柳沢保雄、吉江誠一
四四　臼井茂、長田寿雄、鈴木進高橋真一、中村満夫、長野寿一郎、野間省一、堀豪三増井三郎、増井陸郎、松下清夫、村井東助
四五　青木栄、伊藤敬三、大石清（2）、柏木千秋、草野哲桜井誠、佐野理平、鈴木弥門、須山達夫、竹下定吉、田代正、田附敏三、速水基夫、堀正治、松林晋一、蝦原一郎
四六　青木清明、阿部俊一、磯塚倫三、内山規、大藤道直、河村喜久雄、久留武、長浜謙二
四七　今関智吉、大村三郎、片山正二、亀山敏男、後藤卓郎志田千春、杉江敏男、杉山

総合広告代理店
株式会社 アドプロ
代表取締役　朝比奈　正　三（67回）
東京都千代田区内神田3-4-5　岡崎ビル3階
TEL　03—254—2171（代表）

建築設計・監理
株式会社 ユニオン設計センター
代表取締役　成　岡　英　彦（67回）
一級建築事務所登録7425号
東京都新宿区西新宿7—14—9　規格ビル
TEL　03—363—8604（代表）

栄一、関口不二夫、高山貞男、土井智恵雄、中村豊、夫、野口真、野崎衛治、星野三郎、山上信重、山村俊夫、吉見四郎、鍋田康

四八

岩崎鑑一、大橋広世、太田正元、奥山正、河村祥、加藤博、北村三明、黒水高典寺尾睦之助、高須寿、原崎進一、日比野悦三、福永正美、伏見賢次郎、松岡喜郎山本英夫、近藤希賢

四九

伊藤徹次郎、上杉一郎、上野庸二、江山秀明、小林道雄（2）、篠原泰、嶋三四郎、菅沼栄、鈴木鑑、曽根重四郎、伴野徳三郎、矢崎宗男、安本久、山村忠平

五〇

梅村魁、一一彦、勝又享吉深沢八郎、緑川俊徳、森芳夫、田中誠、大塚武、益田竜也、仁科義郎

五一

飯田鉄雄、伊藤慎吉、小塩洋太郎、佐伯正剛、富安久雄、永井五一郎、原崎郁平福永英武、森弘、山本辰男山本俊朗、渡辺功、塚本四郎、吉井茂、楳田長、田中賢一

五二

綾部立一、石野浩一、小川善次郎、一誠、勝又良男、川島喜八郎、上林明、苫部地一楼、榑松恒右、直原澄衛、鈴木三男、曽根信一、新美弘、弓削恒、西田豊馬為田清

五三

稲畑勝、奥野孝、小野一夫大橋百蔵、加藤俊雄、景山昇、片桐鎮夫、香林竹男、三枝正裕、桜井昌也、志田寿一、島田良彦、園田芳男手島正一、徳永悠久、野崎昌輔、橋本久仁寿、益田貞三、松前新太郎、望月昂月見里得知郎、山菅章雄

五四

安東哲夫、庵原悌次、磯野修、大藤直久、大畑忠夫、加藤和史、黒岩勇三、沢井潤、柴田久夫、下山西四郎杉山茂樹、鈴木猛、高井昂禰津三朗、八木銈次郎、塩谷陽一、篠原範平、平林一郎

五五

相川富士雄、伊藤令一、小沢忠樹、木村康宏、相馬英夫、高橋恒三、武井富夫、塚越修、戸塚正五、中田千東、中田吉信、中野治良、野中篤、法月重雄、松井保治、山本武、吉野悟郎、鷲巣英策、青木和彦、吉田盛昭

五六

青木良文、伊藤卓弥、大庭研也、奥野進、吉川善吉、小坂椰子郎、佐野豊彦、清水逸郎、篠原水穂、杉原泰二、高橋四郎、中村治郎、萩原達雄、萩原仁、橋本保二、原田昇左右、原敏彦、松田一郎、松田光彦、村田大八郎、山田隆、横森桂、佐々木俊夫

五七

岡田久夫、影島利邦、北村正、久保田誠三、坂田秀雄島根光明、杉山正友、富田澄、福住俊郎、藤巻重男、月見里礼次郎、渡辺三郎、米沢正次、天野喜久雄

五八

猪瀬忠賀、桐沢誠、小山昂之、須山静夫、島村悟、鈴木栄三、鈴木勝義、世古真臣、田熊博邦、鷹森立一、萩原義臣、服部健一、林慎原田和彦、藤田登、松田一雄、望月恵一、横山善衛、奥野広、加藤久、宮崎佐一郎

五九

青木豊、青山勇、磯部一、小花敏郎、小沢武彦、奥沢徹、加藤恵一、狩野和男、川田昭、近藤陽三、酒井勇酒井哲夫、清水汪、下村卓也、菅原操、瀬端一男、関寛治、田中隆正、寺尾宏一郎、富永利夫、長谷川邦三平尾昭次、福原元一、山本博、橋爪壮、大塚恒、湯本幸丸、原淳、山口和夫

六〇

上杉重吉、大石隆一、斎木学、鈴木明、野呂実、萩原壮平（4）、服部昌夫、柴田正臣、塩坂治、満田猛、渡辺清夫

六一

伊藤久、大石次男、片桐篤清水照彦、鈴木孝、高村岳史、立花幹夫、花見久、福田英雄、松永典昭、富永辰典、中尾昭、八木貞二、坪田昭三、山崎和夫、芹沢博樹、赤羽昭二、西田駿之介後藤達朗、君島敏男、長瀬修

六二・六三

大塩幸男、加藤昭、白鳥芳夫、大草宏、大竹孝英、真田宗明、布川一夫、高橋孝雄、大石一輔

六四・六五

岩本吉雄、神谷武男野沢正憲、増田誠男、名波倉四郎、長嶋健、山本和彦狩野達彦、杉本哲、松下一男、益頭尚文、阿部修治

六六

石川隆亮、石川怜二、内田幸雄、海野裕男、尾入泰彦大塚修弘、大坪信之、大村敏夫、加藤博司、河守輝雄菊田聡裕、小林成敏、菅原馨、杉村行勇、杉本幸貞、曽根錦吾、田中俊男、田村

同窓会コンペなど、ご相談ください。
伊豆大仁カントリークラブ
伊豆大仁開発株式会社
代表取締役　石橋正秋
取締役支配人　安田正弥（66回）
静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198－1
TEL　0558－76－2401（代表）

新東京印刷株式会社
代表取締役　梶原由三（67回）
東京都中央区八丁堀2－1－7
神鋼ビル
TEL 03－553－8981（代表）

尚、仲野道雄、永田陽一、早見幸雄、原常勝、原野谷朋司、馬淵逸明、三原載、武藤勇、村松武司、山下智康、山梨裕司、村越達彦

六七

朝比奈正三、岩崎為明、大石脩而、岡村英二郎、梶原由三、川上剛二、小坂博、佐藤道雄、佐藤稔、鑪薫明田島一男、土屋晃康、成岡英彦、福原享一、溝口淑郎吉田安子、山岡進、遠藤一彦、黒田秀幸、角田栄一、原崎恵三、増田安国、鳥井滋夫、山本茂、戸塚惣雄、加藤友行、深沢浩二、矢部隆

六八

雨宮明生、石川堯昭、磯西洋、岩瀬順郊、大川庄治、河口浩、栗田端夫、額賀晃生、佐野川好母、白鳥健次高木泰志、鍋田邦彦、仁科将、福地康二、福本準一郎藤波真五、星野敏郎、荒谷じつ子、宇田貞子、伊藤良平、鈴木俊彦、

六九

小笠原英法、神谷貞子、堀久夫、堀場千賀重、松島玲子、松村明子、谷口竜平、八木義弘、福山秀雄、兵藤三郎、内田守孝、村山禎男田川邦子、

七〇

味岡宏、大草敏郎、大場良臣、川端正良、小林孝光、佐々木政之、清水令一郎、塩沢幸雄、新間一憲、関哲男、大長智、中馬敏雄、長倉良松、中山弘道、深見明松浦洋一郎、八木千二、松山多美、小嶋国彦、白石通子、五十嵐公一、若林久二小山清繼、望月智隆、鈴木清、石本明

七一

池端達雄、臼井力、大井康生、加藤祐史、片山守彦、片山嘉博、金子雅彦、栗田甲子男、繁村一雄、実石欣哉、滝裏一郎、谷口滋、徳田武司、富野寿、友田熱、野沢弥寿、林洋右、広田道男、本間啓司、松隈道雄、松原徳満、村松綏啓、山崎恭弘、渡辺弘、竹井三保子後藤弘枝、森川滝太郎、小関修身、稲葉庄二

七二

池ヶ谷寿夫、大石久、大川原武、陰山勇一、木原規之木村順策、小林富士男、佐藤允弥、佐野熙、坂下光夫桜井正之、桜井亮介、笹原英夫、鈴木忠雄、武井正和夏目雅之、仁藤宏次、花田守弘、深田均、前田栄一、松木茂夫、三村修一郎、山口公子、山本隆司、宗野佳郎、山田勝、松島正明、今泉烈、渡辺繁、八木伸明、木村克彦

七三

朝倉捷治、麻生貞敏、深尾皓、山梨由記、間淵啓子、杉山正三、中西英一、羽山武、山下省三、後藤孝子、磯村達三、吉井録朗、岡本修、君島武男、大長義信、近藤守、三枝通康、榊原由之、永田俊彦、望月智、遠山敦子、鈴木智彦、山梨章木村恵一、小林篤夫、柴山欽伍、古井大一朗、佐々木勝彦、深沢靖男、渡辺雅敏

七四

大嶽隆司、中西恭二

七五

佐藤修二、白坂徳雄、川面忠男、佐野康輔、宮村健二勝間田武司

七六

曽根正弘、伊藤征、鈴木浩

七七

野方重人、佐藤翼、岡村稔宇野明彦

七九

上田尚亮、大川明、君島正夫、島田洋子、大草康司

八一

青木隆知、竹内尚興、松永旭、鈴木真男、川田千代子吉田萃

八二

平岩正史

八七

光木互

九二

野毛宏

九三

影山博章、北川博康、松本安彦

九四

光木好、佐塚英俊

九五

青柳朱実、朝倉進、亀山靖沢入美里、増田康企、小林千鶴子、萩原厚、大代倫生神山京子、山崎知子、白鳥政之、八木純子

九六

石田雅彦、内田雅彦、小沢靖弘、加藤公康、新庄尚亮杉森正吾、杉本文秀、竹山努人、中田盛之、前原誠、松井朝比、望月正雄、柳田行範、尾上真弓、高林径子滝本千穂、山崎幸江、中村和子、佐塚一寿、石上純子仲野由里子、渡辺一博、鈴木喜一郎、松本滋、鍋田記久乃、岩橋知郁子、岩本義徳、鈴木敏史、渋沢富美子

九七

（敬称略・期内順不同）

十一月五日現在

謹んでお悔み申し上げます。

狩野敏氏（かのう・びん＝元拓殖大学理事長、東京学生柔道連盟顧問）八日午前八時三十五分、動脈りゅう破裂のため東京都渋谷区の都立広尾病院で死去、八十歳。自宅は東京都杉並区和田一ノ六六ノ一〇。

建築設計・監理
株式会社 奥野建築設計事務所
取締役会長 奥野 孝（53回）
取締役社長 奥野 進（56回）
取締役副社長 吉川善吉（56回）
本社 東京都台東区寿2—5—12 加瀬ビル
TEL 03—842—6831（代表）
静岡事務所 静岡市安東2—8—14
TEL 0542—46—9378

建築コンサルタント・設計施行業務
建築に関する御相談は御気軽に……
株式会社 大雄
取締役社長 奥野 孝（53回）
取締役営業部長 奥野 広（58回）
本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階
TEL 03—834—5331（代表）

鈴与株式会社

取締役会長　鈴木与平（44回）

清水市入船町11－1
TEL（0543）53-3111（大代表）

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長　宮澤次郎（42回）

東京都千代田区神田駿河台1－6
TEL（295）2411（大代表）

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1－5－1
TEL（833）2111（大代表）

株式会社　講談社

取締役名誉会長　野間省一（44回）

東京都文京区音羽2－12－21
TEL（945）1111（大代表）

株式会社　東電社

取締役社長　岩波信平（42回）

東京都中央区日本橋2-1-21
TEL（271）2701（大代表）

合同酒精株式会社

取締役副社長　堀　豪三（44回）

東京都中央区銀座6－2 合同ビル
TEL（571）8641（大代表）

川根銘茶

三保乃園　山菅茶店

山菅章雄（53回）
（村松正七）

東京都港区南青山1－20－6
TEL　03－403－5760

本田技研工業株式会社

川島喜八郎（52回）

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL（499）0111（大代表）

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役　岩井平一郎（57回）

本社　静岡市国吉田645
TEL 0542（62）1111（代）
東京　中央区京橋1-2越前屋ビル
TEL 03（272）4651（代）

新日本証券株式会社

取締役社長　大石　厳（53回）

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL（273）2311（大代表）